



NEWS

No.148
December 2012

(社) 日本工学アカデミー広報委員会

Office : 〒108-0014 東京都港区芝 5-26-20
建築会館 4F

Tel : 03-5442-0481

Fax : 03-5442-0485

E-mail : academy@ejar.or.jp

URL : http://www.ejar.or.jp/



国際工学アカデミー連合(CAETS)理事会・評議会他出席

国際委員長 小泉 英明 / HIDEAKI KOIZUMI

国際工学アカデミー連合(CAETS)は、26カ国、それぞれを代表する工学関連アカデミーから構成される連合体組織です。日本は第10番目に加入することができました。理事国は各国の連番制で、本年から小宮山宏会長がCAETS理事に就任されました。しかし、今回の総会(理事会・評議会)へはどうしてもご都合がつかないため、役者不足ながら国際委員長が名代を務めることになりました。

今年は、スイスが議長国であり、R. Daendliker CAETS総裁の下、チューリッヒにて8月末に総会と併催シンポジウムが開催されました。今年は26カ国の工学関連アカデミーの会長や国際委員長が参集され、喫緊の科学技術の課題、そして各国連携の方策について、Daendliker総裁の的確な采配の下、熱い議論が繰り広げられました。併催シンポジウムのテーマは「都市開発と公共交通」で、テーマはコンパクトながら、細部まで検討されたステートメントが最終日に採択されました。

来年のCAETS総会主催国はハンガリーで、併催シンポジウムのテーマは「Engineering教育へ向けた革新的アプローチ」にて承認されま

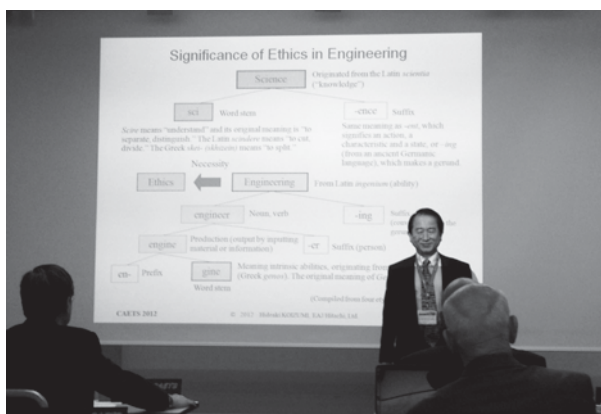


併催シンポジウム
(R. Daendliker CAETS総裁の挨拶)

した。また、シンポジウム前半と後半の基調講演は、C. Vest元MIT総長と日本の小泉に依頼したいとJ. Ginszler次期総裁からご提案があり、理事会並びに評議会で承認されました。急なご提案を頂戴してびっくりしましたが、昨年のメキシコ市で開催されたCAETS評議会での議論が、関係しているようでした。

さらに再来年は中国で開催され、テーマは「Engineeringと人類の未来」とすることが承認されました。中国では2014年に、中国工程院創立20周年を迎えますが、それまでに科学技術政策と産業政策の国家のシンクタンクとして、体制整備が急速に行われつつあります。工程院院士(アカデミシャン)の若年化を図り、また、事務局も100名体制を目指します。今回のCAETS総会でも6名(内2名は講演関係者)の使節団を送り込み、最大の勢力となりました。評議会でも、Pan Yunhe常務副院長自ら講演され、中国が今後、大都市を次々と建設するにあたり、エネルギー・環境・交通・健康・教育・食糧等を最適化した将来都市構想を、1年以内に工程院で打ち立てると宣言されました。

評議会では日本からは、佐久間象山の「東洋道



評議会での日本からの発表

徳・西洋芸術」の言葉にしたがって、「Engineeringの倫理」のお話を致しました。現在のscience、engineering、technology、artは、どれも17世紀以降に現れてきた概念であって、独立に深化し重層化されています。けれども、science、engineering、technology、artの語幹を古代ギリシャ語に遡ると、それぞれ、sci(skei):分ける(要素還元)、gin(gen):生み出す(創出)、techno(tekhne):造る(自然の模倣)という原義が見えてきます(古代ラテン語のarsはtekhneと同義)。象山の「芸術」とは「技術」を意味し、江戸時代までは、artと言うよりもtechnologyの意味だったのです。西洋では、造物主が創りあげた自然界を要素に分けて、その要素間の因果関係を人知で解明するのがscienceでした。一方、自然界に無いシステムを人知で創りあげるのが、engineering(中国語では「工学」)です。自然界を知ることだけでは、倫理はほぼ無縁ですが、自然界に存在しなかった人工物を持ち込むには、そこに責任が生じます。そこで、scienceより



フォンデュレストランで
(左から J. Zillman 元 CAETS 総裁、
A. Van Cauwenberghe 元 CAETS 総裁)

遥かに濃厚な倫理の必要性が生じると考えました。

お陰様で、この考え方は Daendliker 総裁初め多くの方々の賛同を得ることができました。その晩は、ベルギーの A. Van Cauwenberghe 元総裁とオーストラリアの J. Zillman 元総裁が、「一緒に旧市街へフォンデュを食べに行かないか」と誘って下さいました。氷雨の中を川沿いの風が吹き抜ける店まで歩き、夏なのに毛布を膝に掛け、一緒に熱いフォンデュを突付きながら和気藹々と、いつまでもお話は尽きませんでした。

今回の CAETS 総会では、東日本大震災被災地の復興状況について、日本への多くの質問を頂戴することが予想されました。そこで直前のお盆休みを利用して、福島、そして仙台平野から牡鹿半島の沿岸部にかけて、実際に歩いてまいりました。また、東北電力女川原子力発電所を訪問させていただきました。ご案内の通り、東京電力福島第一原子力発電所と比較して、震源に近いより激しい揺れと波高13メートルの同等の津波に襲われましたが、日常の訓練通りに冷温停止されました(8月のIAEA(国際原子力機関)査察でも確認)。総会での種々のご質問には、事前準備の結果を踏まえて客観的にお答えするように努めました。

お世話になりました女川原子力発電所の津幡俊所長、加藤功所長代理を初めとする皆様、また、訪問手続きの労をお取りくださいました田中秀雄 EAJ 広報委員長に厚く御礼申し上げます。今回の CAETS 総会出席の準備全般で、お世話になりました EAJ 国際委員会並びに事務局の皆様にも深謝致します。

NEWS

第11回日米先端工学(JAFOE)シンポジウム

常務理事 玖野 峰也 / MINEYA KUNO

2012年10月28日(日)夕刻のレセプションから始まり、翌日はNAEとEAJから簡単な開会挨拶の後、直ぐに日米の運営委員長から今回のコンセプトである「Engineering for X」の説明があり、この4つのXについて2日半に亘り日米58名の若手技術者がカリフォルニア州IrvineのBeckman Centerで熱い議論を戦わせました。今回の特徴はXとして農業とスポーツも取り上げるなど、従来にない分野に踏み込んだことです。4分野毎の日米運営委員の努力の結果、従来以上に参加者の充実感が感想文に現れています。

ご支援を賜ったJST並びに参加された皆さんに厚くお礼申し上げます。次回は2014年に日本で開催いたします。



青木 慶 産業技術総合研究所 大分刺激を受けましたが、特に、若手同士の気安さか、発表に対して次から次へ場内から質問が飛び出すのは、日本に限らず他の国際会議でもあまり見られない光景でいい雰囲気でした。ただ、自分の発表の時にはハプニングもあり、質問時間が得られなかったので、それが少し残念ではありました。

東 宏樹 (独)防災科学技術研究所 JAFOE2012の参加者は、どなたも Issue への関心と異分野への適応力が高く、充実した議論が展開された。セッション中はもちろん、食事や休憩中、ポスター発表や Vineyard 見学においても常に積極的な意見交換がなされた。この良質な刺激と熱を今後の研究開発に活かしていきたい。

石川顕一 東京大学 私の専門とは大きく異なった分野であったにもかかわらず、講演はいずれも示唆に富んで興味深く、質問や議論を通して視野を広げることができ、今後の自分の研究にプラスであった。ポスターでは、分野の隔たりにもかかわらず、私の研究(アト秒科学)にも多くの参加者に興味をもって頂けた。

伊高健治 弘前大学 一般討議者としての立場では、非常に面白い有意義な会議であり、自分の能力の過不足が実感できる良い機会であった。しかし、自分の専門分野である材料科学者としての特徴や発想が出し切れなかった感があり、自己の異分野を見る視点・能力について深く考えさせられた。

一条憲明 株式会社IHI 基盤技術研究所 熱・流体研究部 現在の業務に直結する情報の収集はもちろん、異分野の技術者の研究アプローチ等、技術者として役立つ情報を得るという視点も持って参加した。各参加者のプレゼン技術、討議能力等々、今後研究を進めるうえで多くの刺激を受けた。

伊山 潤 東京大学 JAFOEは、各々の研究の意義と限界について、異分野・異言語の相手に向けての説明を強く要求するという厳しいものであったが、しかしこの要求は社会からの工学者に対する要請そのものである。この貴重な機会を提供してくれたEAJ/NAEに深く感謝する。

岩下友美 九州大学・JPL 本シンポジウムで、同じ工学と言えども異分野の方々との議論を通して、私の研究内容が異分野で役にたつ可能性を強く感じました。また2日半を参加者全員と共に過ごすことで、将来必ず有用な日米ネットワークを築くことができたと思感しています。

大林洋子 味の素株式会社品質保証部 企業からのスピーカーとして、Food Safetyに関して口頭発表を行った。セッション以外にも朝・昼・夕食時等、参加者同士が交流する機会が多く設けられ、普段接する機会のない日米の異分野の人達から多くの興味深い情報を得られたと思う。

小倉麗子 ソニー(株) 非常にエキサイティングな毎日だった。初めは全くの異分野の科学者・エンジニアが一堂に集められても戸惑うだけだろうと考えていたが、主体的にシンポジウムを作り上げていく様は、まさに「異化効果」を体現していた。これこそ閉塞感漂う日本の科学界に大切なイベントだと思う。

加賀智之 トヨタ自動車 様々なバックグラウンドの人々とたっぷり議論を交わすことができ、日常の業務では小さくなりがちな思考をリフレッシュすることができた。それぞれ全く異なるように見える分野にも、共通する課題を見出すことができたことが興味深い。純粋に楽しく刺激的な2日半でした。

金谷一郎 大阪大学 昨年の第10回JAFOEをひとつの区切りとし、今年はテーマ設定方法を一新した。従来の「X科学に基づく工学」ではなく「Xというアプリケーションのための工学」という観点から四つのセッションを構築した。日本を代表するメンバーに恵まれ、日米で本当の議論が出来た。関係諸氏に感謝。

清川 清 大阪大学 快晴のアーバインでの三日間は大変楽しかったです。会議中は申し訳ないくらい質問をしまくり、たっぷり満喫させていただきました。今後は異分野交流で得た刺激や築いた絆を自分の分野の発展に活かしていきたいと思えます。運営された皆様、金谷委員長、ありがとうございました。

清本晋作 (株)KDDI研究所 初参加でしたが、普段接点のない分野の研究者と意見交換することができ大変有意義でした。セッション企画の段階からメールベースでの議論に参加できるようにするなど、会合開催中のみならず、その準備段階でも積極的に参加できる機会があると良いと感じました。

日下彰宏 鹿島建設(株) 運営委員として、有意義な議論となるように人選・話題選びに腐心したつもりである。シンポジウムでは、異なる背景をもつ人々に向けた発表、議論の仕方について大いに勉強になった。貴重な経験を積ませていただいたことに感謝します。

倉田真宏 京都大学 分野のまったく異なる講演や討議をこれほど多く拝見する機会はめったになく、研究に対する嗅覚の違いを感じたり、同じ論理の組み立て方に安心したりしました。非常に良い経験になりました。これからも参加者の皆様との交流を続けていければと願っています。

相良純子 建設技術研究所 各分野の第一線で活躍する技術者による趣向を凝らした発表や専門領域を超えた熱い議論には刺激を受けました。そして何よりも、日米の素晴らしい技術者の方々と出会い交流できたことが大きな収穫となりました。開催にご尽力くださった方々に心より感謝いたします。

庄司 学 筑波大学システム情報系 参加者1人1人が、関与している工学領域を越え、ほんのわずかであるが、1歩先を見据えているように感じ、そのためか、セッションや会場外での議論が良質な方向にaccelerateし、議論を通じて新たな着想を得る非常に良い機会となった。

杉本麻樹 慶應義塾大学 Video Content Analysis分野の討議者として参加させていただきました。普段の研究分野からは関わりの薄いスポーツエンジニアリング、農業・食品、防災・リスク管理など、多様な分野の先端研究に触れることができ刺激的な体験でした。今後の研究を考える上で貴重な機会となりました。

鈴木彌生子 農業・食品産業技術総合研究機構 異なる4分野が“工学”というキーワードを共通項に集い、幅広い知見を共有し、新たな視点で議論する非常に個性的で充実した会議でした。短期間ながら皆さんととても親密になることができるのはJAFOEならではの本当に貴重な経験でした。この出会いを新たな展開につなげられるように頑張ります。

多田千佳 東北大学農学研究科 突然のプレゼン代替に緊張。米国人の意思伝達能力の高さに驚！幅広い知識思考、自国歴史文化今を語る力の必要性を実感。多様な視点・規模も知る。超刺激的時間。帰国後、ゼミの新時間「和」を作る。「和」を3分語ることで、国際的日本人に育ち、育てたい。

長坂善禎 (独) 農業・食品産業技術総合研究機構 「農業」というテーマは範囲が広く、当初は不安があったが、セッションでは日米の講演者、討議者の協力により活発な議論ができ、参加者の農業に対する関心が高まったのではないかと思います。今回の経験を今後の仕事に生かしていきたい。

中島義和 東京大学大学院工学系研究科 Video content analysisセッションのオーガナイザーを担当させていただきました。分野が異なる研究者の交流により、同分野内での交流では得られないアイデアの創発や、「工学」分野としての広い意識を得ることが出来た。

中村康雄 同志社大学スポーツ健康科学部 スポーツ工学セッションのオーガナイザーとして参加させて頂きました。セッションでは、様々な視点のご意見を頂き、非常に参考になりました。皆様に感謝するとともに、昨年12月の準備時期からJAFOEに関わることが出来たことを非常に嬉しく思います。

堀田悦伸 富士通研究所イメージコンピューティング研究部 JAFOE2012に参加させていただき、ありがとうございました。業種の異なる分野で活躍される研究者と親密な交流ができ、また日米の研究者同士の活発な議論に触れることができ、とても有意義なシンポジウムでした。関係者のご尽力に感謝致します。

宮崎祐介 東京工業大学 研究内容のみならず日常生活も含めて異分野交流をするというのは、これまでの研究人生で初であり、これからはなかなか味わえないであろう濃密な体験であった。分野は違えども共通の問題とそれに対する方法論が存在するということを体験できた貴重な機会であった。

村地由子 スイス・リー・インターナショナル・エスイー 日本支店 自然災害セッションのスピーカーで参加しましたが、JAFOEが他の発表と異なる点は、質問の背景が分かり辛いことだと思います。今回のJAFOEで他分野の方との交流を体験でき、今後に役立つ経験ができました。

森安健太 株式会社アシックス Sports Engineeringセッションで、シューズの機能設計について、報告させていただきました。分野の異なる皆さんに対する発表でしたが、様々な視点から多くの質問や意見をいただけ、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。今回推薦いただいたことを心から感謝いたします。

吉田宏昭 信州大学繊維学部感性工学課程 シンポジウムに参加させて頂き、誠にありがとうございました。様々な分野の研究者と親密に交流でき、非常に楽しかったです。三日間英語漬けだったのも良い刺激になりました。ただ、ポスターセッションの時間が思ったよりも少なかったのは残念でした。

◇日時：2012年10月18日(木)

◇場所：福岡県立香住丘高等学校

◇講師：

小宮山 宏氏

(日本工学アカデミー会長)

松本 広重氏

(九州大学稲盛フロンティア研究センター教授)

早瀬 修二氏

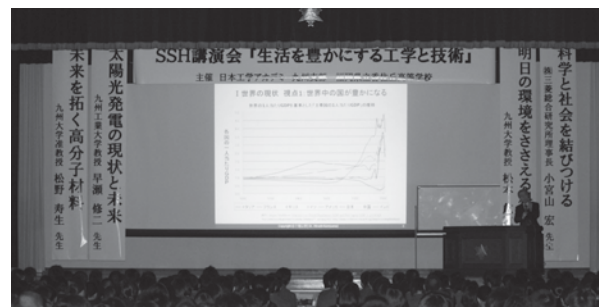
(九州工業大学大学院生命体工学研究科教授)

松野 寿生氏

(九州大学工学研究院応用化学部門准教授)

将来日本の工学分野を先導し、リーダーとなる人材育成は、日本工学アカデミーの重要な役割である。現在、工学分野で顕著な業績を挙げ活躍しておられる研究者を、スーパーサイエンスハイスクールに指定されている福岡県立香住丘高等学校へ派遣し、高校生に「生活を豊かにする工学と技術」という主題で講演会を行った。四人の講師には、工学分野のトピックスである工学と社会とのかかわり、環境、エネルギー、材料の分野で講演をお願いした。この講演会の開催主旨は、工学・技術が私達の日常生活を如何に豊かで幸せにしているかを若い人達に理解してもらうためである。さらに、高校生が工学に興味を持ち、大学の工学系に進学を希望するだけでなく、物づくりや超精密技術の発展に貢献する人材を増すためである。

基調講演をお願いした小宮山宏氏は、「科学と社会を結びつける」というタイトルで講演を行った。21世紀に入ってノーベル賞受賞者数では日本は第3位であり、医学・理工学分野での科学技術力に日本国民は、もっと自信を持つべきであると高校生に話しかけた。



松本広重氏は、「明日の環境をささえる科学技術」というタイトルで講演を行った。環境汚染を防止する技術の一つとして自動車触媒、省エネルギーのための技術としてヒートポンプ、さらにエネルギー源の転換に向けて新しい技術として注目されている燃料電池の話を、詳細かつ具体的に高校生が理解しやすいように話された。

早瀬修二氏は、「太陽光発電の現状と未来」というタイトルで講演された。太陽光発電は、発電中に燃料が必要でなく、二酸化炭素を発生しない等の利点があり、今後もさらに発展する技術分野であると高校生に語りかけられた。

松野寿生氏は、「未来を拓く高分子材料」というタイトルで講演された。高分子材料が如何に私達の日常生活を豊かに暮らしやすくしているかを、高校生は理解できたと思う。

講演は香住丘高等学校の体育館で開催され、1、2年生約800名が参加した。時間の都合上、一講師に一つの質問で、多くの高校生からの質問が受けられなかったのは残念であった。高校生は非常に熱心に各講師の話を聞き、「生活を豊かにする工学と技術」に関して、十分な理解をしたと思う。このような講演会が国内で広まると優秀な高校生が工学に興味を持ち、大学の工学部への優秀な受験者が増加すると信じている。



梶山 千里副会長



小宮山 宏会長



松本 広重氏



早瀬 修二氏



松野 寿生氏

北海道・東北地区活動としての講演会が、平成24年10月18日(木)15時から、福島テルサ研修室で、18名の聴講者を集めて開催された。講演会は井口泰孝工学アカデミー理事の司会で進められ、まず阿部博之工学アカデミー副会長から原発事故の渦中にある福島へのお見舞いと支部化のための準備委員会発足に向けた準備状況の報告があった後に、入戸野修福島大学学長から主催者側の挨拶があった。特別講演は以下の2件であった。

福島大学共生システム理工学類教授の難波謙二先生による「福島県における放射線災害関連の各種活動の現状紹介」と題する講演では、まず福島大学放射線計測チームによる汚染マップの紹介があり、土壌、河川、地下水などのセシウム、ヨウ素、プルトニウムによる汚染分布と経時変化のデータならびに除染の効果が示された。長期的対策にはガバナンス・除染計画・住民コミュニケーションの観点からの総合的アプローチが必要で、そのために環境放射能研究所を是非設立したいとの強い希望を述べられた。会場からは放射線の人



阿部 博之副会長



入戸野 修会員

体への影響などについて数件の質問があった。

次に日本大学工学部教授・東北大学名誉教授の加藤康司先生による「近未来社会の工学とロハスの家」と題する講演では、人間社会の存続を脅かす環境の劣化、人口増加と大都市への集中、資源エネルギー枯渇などの難しい問題を指摘された後、破局からの脱出には若者の力が必要であり、彼らが一生かけて取り組める工学上のテーマを、産業と工学の歴史を振り返りながら語られた。講演は「ロハスの家」に至って佳境に入ったが、会場の都合により最後までお話しただけなかった。

講演会は17時15分で終了し、市内の和食レストラン富丁に場所を移して15名での懇親会が行われた。会の司会は福島大学副学長の高橋隆行先生にお願いした。講演会の続きの意見交換を初め、様々な話題に花が咲き、19時30分に終了した。次回は本年12月に仙台で支部化のキックオフに合せて開催の予定である。



難波 謙二氏



加藤 康司会員

小宮山宏会長が推進するプラチナ構想ネットワークは、日本社会が解決する課題は、環境問題、高齢化、活力ある地域づくりなど様々で、日本が世界の中で、これらの課題をいち早く経験する「課題先進国」であると考え、これを日本が再生・成長するためのチャンスと捉え、他に先駆けて「課題解決」することで、新たな需要、新たな経済活動をオールジャパンを超えた世界

に開かれた体制で創造していく組織です。

設立組織としては、日本の「知」を結集し、新しいまちづくりを提案する全国規模の連携組織です。2010年8月に設立されました。

組織は、会員として自治体会員111自治体、企業など法人会員72社、特別会員39名、海外会員1名。運営は幹事会役員会、執行役員会、プロジェクトが置かれ、行われています。

小宮山宏会長が「プラチナ社会」の必要要件として、次を定義しました。

「エコロジー」

(公害克服、生物多様性、地球環境)

「資源の心配ない」(省・新エネ、一次産業、循環型)

「老若男女が参加」(生涯成長、複数機会)

「心もモノも豊か」(文化、芸術、文明、GDP)

「雇用がある社会」

(イノベーションによる新産業)

「限界を超える成長」は「Quality of Life」

さらに、プラチナ構想ネットワークが目指す重層構造は、これまで個々にプロジェクトを行ってきた自治体、大学、研究機関、企業、海外都市をネットワークで結ぶことで知識、情報、ものづくり、流通など多くの側面でスケールメリットと新たな価値創造をもたらします。

プラチナ構想ネットワークの活動現状は、年2回のシンポジウムの開催、プロジェクトによる活動(スマート林業プロジェクト、健康・医療・介護プロジェクト、ゼロエミスクールプロジェクト、社会参加型プロジェクト、地域指標プロジェクト、スマートシティプロジェクト、水素活用プロジ

ェクトなど自治体メンバー・企業メンバーが一緒になって多くの取り組みが行われています。

また、会員自治体・企業などの若手人材を養成するプラチナスクールは、月1回二日間、6カ月に渡って毎回約20名が経験豊かな講師陣からプラチナ学の講義を受け、研鑽しています。すでに一期生、二期生の発案によって同窓会も設立され、ネットワークオブネットワークスの趣旨が生かされています。

特に、今年度初めに刊行した「プラチナハンドブック」は、プラチナ構想ネットワーク初の成果物です。目下紙媒体でなくITベースで会員地域の活動状況をリアルタイムに検索できるシステムを構築中、今年度末のオープンを目指しています。

さらにプラチナ構想ネットワークでは、自治体の活動を顕彰する「プラチナ大賞」を設け、本年12月に公募要領を発表し、表彰は明年7月に行う予定。奮っての応募を呼び掛けています。

最後に、当会は2011年3月10日付けで同会と「お互いの知識とネットワークを活用しつつ、活動をより高度なものへ成長させていく」ことを目的として、連携協力協定を締結しています。

NEWS

臨時総会

常務理事 玖野 峰也 / MINEYA KUNO

2012年11月15日(木)16:30から臨時総会が、芝浦工業大学芝浦キャンパス705会議室で、出席正会員23名、表決委任正会員475名、合計498名の出席を得て開催されました。議案1の「主たる事務所の住所変更に伴う定款変更」と、議題2の「公益社団法人への移行に伴う定款変更」がそれぞれ正会員総数647名の三分の二以上の賛成で議決されました。

議題1は、現在の賃貸事務所の契約満了に伴う事務所の移転に伴うもので、後述の通り11月末に建築会館4Fに転居いたします。

一方の議案2は、公益社団法人に移行するのに必要な定款の改定を実施するもので、今後早急に公益認定の申請を行い公益社団法人としてのメリットが生かせるよう努力してまいります。

*11月28日(水)以降、事務局は以下の住所に変わります
新住所：〒108-0014 東京都港区芝5-26-20 建築会館4F
(Tel・Fax・E-mailは以下のとおりこれまでと変わりません)
Tel：03-5442-0481 Fax：03-5442-0485
E-mail：academy@ejaj.or.jp

建築会館案内図



アクセス：JR山手線・京浜東北線「田町駅」、
都営地下鉄三田線・浅草線「三田駅」より徒歩3分

国際委員長 小泉 英明 / HIDEAKI KOIZUMI

本事業は、2008年の日豪政府間合意に基づき、次世代研究リーダー育成と科学技術交流促進を目的として2010年より実施しています。予め合意された3つの応用研究領域における45歳以下の研究者が8名ずつ相手国に2週間滞在し、個別に複数の研究機関を訪問して具体的な研究協力関係の構築を図るものです。運営には、日本学術振興会、日本工学アカデミー及び豪州工学アカデミーが協力して当たっています。

第1回交流は2010年2月(日→豪)及び11月(豪→日)に実施し、第2回は2012年2月(日→豪)を終え、来る2013年3月4日～15日に豪州から、Health & Technology、ICT、Nanotechnology & New Materialsの3分野8名の研究者を受け入れます。

今後とも適切な分野を選択することにより、ERLEP同窓会が異分野連携の母体へと発展することも期待されます。

関連分野の会員諸氏にも受け入れへの協力を依頼することがありますが、科学技術水準が高い資源国である豪州との絆を強化するためにも、是非積極的な参画をお願いいたします。

参考：EAJ NEWS No. 145 及びHP

<http://www.eaj.or.jp/openevent/erlep-j.htm>



第1回受け入れ豪州研究者報告会
於 駐日豪州大使館

新入正会員のご紹介

(2012年8月入会者)

[第2分野]
こばやし なおと
小林 直人



早稲田大学研究戦略センター副所長・教授

1950年千葉県生まれ。1978年京都大学大学院工学研究科博士課程修了(工学博士)。同年、通商産業省電子技術総合研究所入所、1998年量子放射部長。2001年産業技術総合研究所(組織変更)光技術研究部門長、2003年同所理事。2009年より早稲田大学研究戦略センター教授。専門は超高速光工学、研究戦略・評価論。

[第4分野]
さかた けんじ
阪田 憲次



(一社)岡山県コンクリート技術センター理事長

1943年中国天津特別市生まれ。1969年京都大学大学院工学研究科修士課程修了。岡山大学環境理工学部部長、自然科学研究科長を経て名誉教授。ダム工学会会長、日本コンクリート工学会会長および土木学会会長を歴任。

はらた のぼる
原田 昇



東京大学大学院工学系研究科長・工学部長・教授

1955年愛知県生まれ、1983年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(工学博士)。日本学術振興会奨励研究員、計量計画研究所研究員を経て、1985年東京大学助手、1992年東京大学助教授、1999年東京大学教授、2012年より東京大学工学部長・工学系研究科長。専門は都市計画、交通まちづくり。

〔第7分野〕
いがらし やすお
五十嵐 泰夫



東京大学大学院農学生命科学研究科教授

1948年東京都生まれ。1977年東京大学大学院農学系研究科博士課程修了(農学博士)。日本学術振興会奨励研究員を経て、1978年東京大学助手、1994年同助教授、1996年東京大学大学院農学生命科学研究科教授。2005～2007年、日本生物工学会会長。2006年より東京大学生物生産工学研究センター長併任。専門は応用微生物学、環境微生物学。

はらしま さとし
原島 俊



大阪大学大学院工学研究科(生命先端工学専攻)教授

1949年愛媛県生まれ。1977年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了(工学博士)。1978年日本学術振興会奨励研究員。1979年大阪大学助手(工学部)。1988年同助教授。1997年同教授(応用生物工学専攻)。2007年～2010年、大阪大学生物工学国際交流センター長。2011年から日本生物工学会会長。専門は生物工学(産業微生物遺伝学)。

ふくだ ひでき
福田 秀樹



神戸大学長

1947年京都府生まれ。1970年京都大学工学部卒業。同年鐘淵化学工業(株)(現(株)カネカ)入社。1994年神戸大学工学部教授。2003年自然科学研究科長。2007年自然科学系先端融合研究環長。2009年より現職。1980年工学博士(京都大学)。専門は生物化学工学。

よしだ としおみ
吉田 敏臣



大阪大学生物工学国際交流センター招へい教授

1939年大阪生まれ。1943年大阪大学大学院工学研究科(発酵工学専攻)博士課程修了。大阪大学生物工学国際交流センターなどで工業微生物やバイオテクノロジーの分野で教育・研究と国際交流活動に従事。今後も東南アジア地域のバイオ産業振興に微力を尽くしたい。

〔第8分野〕
はしもと まさひろ
橋本 正洋



早稲田大学大学院国際情報通信研究科教授・ナノ理工学研究機構副機構長

1957年清水市生まれ。1982年東京工業大学大学院修士課程修了。同年通商産業省入省。大学連携推進課長、新エネルギー・産業技術総合開発機構企画調整部長、特許庁審査業務部長などを経て、2012年より現職。専門はイノベーション学。2008年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(博士(工学))。

INFORMATION

佐波 正一 会員
2012年9月10日逝去 93歳
(株)東芝特別顧問

1941年12月 東京帝国大学電気工学科卒業
1942年1月 東京芝浦電気(現東芝)入社
1980年6月 同 社長
1986年6月 同 会長
1987年4月 EAJ設立発起人

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

乾 崇夫会員
2012年9月13日逝去 92歳
日本学士院会員
東京大学名誉教授

1943年9月 東京帝国大学船舶工学科卒業
1958年6月 東京大学教授
1980年4月 東京大学定年退官、玉川大学教授
1987年4月 EAJ設立発起人

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

草川 隆次会員
2012年10月7日逝去 94歳
早稲田大学名誉教授

1942年9月 早稲田大学応用金属学科卒業
1942年10月 応召(陸軍兵器学校教官)
1961年4月 早稲田大学理工学部教授
1976年10月 早稲田大学鉱物研究所所長
1987年4月 EAJ設立発起人

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

高木 俊宜会員
2012年11月7日逝去 87歳
鶴学園(広島工業大学)総長
(株)イオン工学研究所特別顧問
京都大学名誉教授

1947年9月 京都大学電気工学科卒業
1949年9月 京都大学大学院特別研究生(前期)修了
1949年10月 神戸工業(株)(現富士通)入社
1965年8月 京都大学教授
1978年4月 イオン工学研究所施設長
1988年3月 京都大学定年退官
1988年11月 (株)イオン工学センター副社長・研究所長
1987年4月 EAJ入会

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

竹山 秀彦会員
2012年11月9日逝去 90歳
東京農工大学名誉教授
神奈川工科大学名誉教授

1945年9月 東京大学造兵学科卒業
1949年3月 東京大学工学系大学院修了
1949年4月 工業技術院機械技術研究所技官、生産工学部長
1977年4月 東京農工大学工学部教授
1986年3月 同 定年退官
1986年4月 幾徳工業大学(現神奈川工科大学)教授
1987年4月 EAJ設立発起人

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

顕彰・叙勲

2012年度文化勲章および文化功労者、秋の叙勲・褒章受章者が発表されました。その栄に浴された会員に、心よりお祝い申し上げます。

賀詞交歓会

◇日時：2013年1月17日(木)

12:00～14:00

◇場所：ホテルJALシティ田町
地下1F「瑞祥」

*詳細は正式なご案内をご覧ください

事務局年末年始休業

12月29日(土)から1月6日(日)まで、事務局の年末年始休業といたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

編集後記「農業に役立つ放射能汚染対策研究が必要」

福島第一原発事故から1年半が過ぎた。放射能についての情報は場所と食品のモニタリングデータは非常に多いが農業関連のデータは意外と少ない。山間の水田での汚染米は、穂が出る直前に何らかの原因で放射性セシウムが吸われていた特殊な例であることが判った。イネは土に吸着した放射性セシウムは吸収できず、水に溶けた場合のみ吸収する。イネの根は穂が実る時期には下方ではなく水平に育成し体をしっかり支える。つまり根が土の表層の分解される有機層と接触し放射性セシウムを吸うのではないかと考えられる。一方、牛の場合は汚染した干し草を与えるとすぐにミルク中に放射性セシウムは出てくるものの、汚染しない飼料を与えるとその値は下がっていく。事故直後は効果的な対処はできなかったと思われるが、今考えれば汚染した動物も汚染しない飼料を与え続ければ除染ができたのかもしれない。除染は急がれることから今、重機などを用いる除染活動が展開しているが、それと平行して汚染状況や動態など現場の研究が欠かせない。私達、東大農学部では約40人の研究者が農業現場で役立つ研究を地道に進めているところである。

(中西友子)